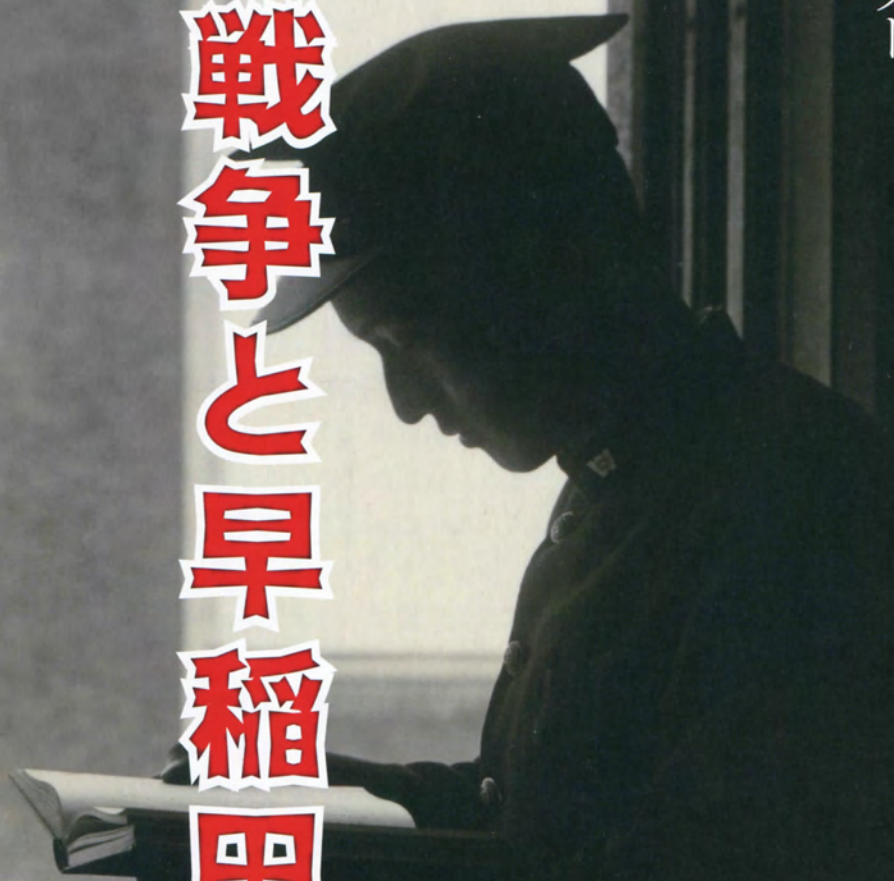


早稲田大学大学史資料センター

二〇一四年度秋季企画展

十五年戦争と早稲田





## 2014年度秋季企画展 十五年戦争と早稲田

### プロローグ

戦争とは非日常的な世界である。善良な一市民が、あるいは年端もいかない子どもが、時には銃を持って加害者となり、同時に被害者ともなる。現在も、空襲により足の踏み場もないほどに死体の散乱した罹災現場など、世界各地の戦場における凄惨な場面を、メディアを媒介として目にする機会は少なくない。

一方で、“狂気”とも呼ぶべき戦争の世界は、私たちの日常と完全に切断して存在するわけではない。狂気と日常とは背中合わせの関係にあり、戦争とは平穏な日常生活の“すぐそこ”に在ることを忘れてはならない。

1930年代から1945年までのいわゆる十五年戦争期、大学や学生は常に戦争や自らの死といったものを意識しながら、平穏な日常を過ごさねばならなかった。しかし、戦争との関係において、大学は単なる被害者という立場に安住することはできない。国家による統制と弾圧がいかに苛烈であったにせよ、大学が“積極的”に国策に追従したことは明らかであり、戦争遂行に果たした責任と、それに対する追及から免れることはできない。

一方、学生はどうであっただろうか。戦前期において知識人の一翼を担っていた学生は、自らの使命感を強く意識し、学生時代から社会との関係を築いていた。時には、政治情勢に敏感に反応し、大学を含めた“権力”に対して異議申し立てを行なった。しかし、満州事変の勃発によって状況は一変する。排外熱と軍国主義の高揚のなかで、大学も学生も、次第に戦時体制へと突き進んでいくこととなった。思想弾圧が苛烈であればあるほど、その閉塞感からの“逃避”が戦争への熱狂を生み出したともいえる。

また、留学生、特に植民地出身の“留学生”にとって、戦争は自らの存在の“不確かさ”を自覚させる契機となった。彼らは“祖国”のエリートとして、宗主国日本に留学した。宗主国による戦争への協力は、植民地出身学生に“祖国”と宗主国との板挟みという苦痛と苦悩を強いることもあった。

1945年8月の敗戦によって、戦争が直ちに“終結”した訳ではない。敗戦によって、あらたに戦争処理と戦争に対する“清算”が始まったのである。占領下において、大学は自らの戦争責任と真摯に向き合い、その責任を果たしたといえるであろうか。

国家と大学・学生との関係は、現在においても形を変えて存在する。であればこそ、“学の独立”のありかたをあらためて考えてみることも必要ではなかろうか。

※本図録に掲載した資料は全て早稲田大学大学史資料センター所蔵。

また、掲載した写真・資料は、展示資料の一部です。

# I 閉塞と熱狂

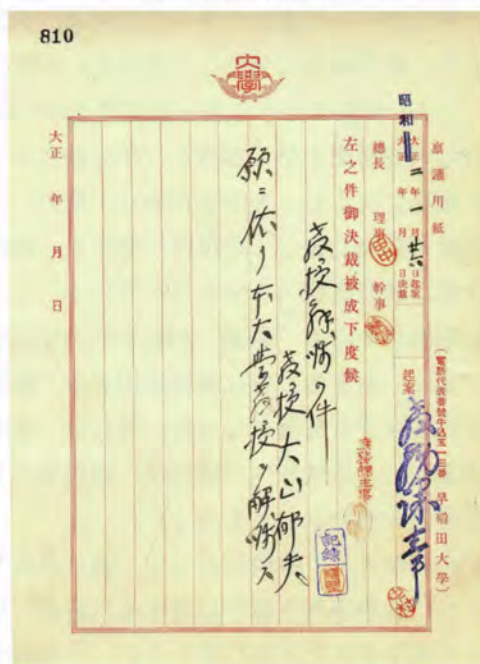
## 1 学生運動と思想統制

1920年代のデモクラシーの潮流は、学生をして政治参加と“変革”への情熱を惹起させた。普選運動・社会主義・政党内閣というキーワードに象徴される社会情勢に対して、大学も学生も敏感に反応した。“マルクス主義の牙城”と目された早稲田大学はその中心的存在でもあった。こうしたなかでおこった早慶戦切符事件は、大学に対する学生の不満を象徴する事件であった。

一方で、政府による思想弾圧、なかでも社会主義・共産主義運動に対する弾圧は徹底され、大学においても教員・学生の社会運動への参加に対する監視体制は強化された。1923年（大正12）の佐野学・猪俣津南雄に対する強制的な研究室の搜索（研究室蹂躪事件）は、大学における学問も思想弾圧の対象となることを強烈に意識させた。1930年代以降は、治安当局による監視体制はより強化され、同時に大学もこれに対し過剰ともいえる対応を示した。学生に対する取り締まりは、彼らの政治活動にとどまらず、日常的な生活・風紀全般に及ぶこととなった。

このような時代を象徴するのが“大山事件”である。1917年（大正6）の早稲田騒動で学苑を離れた大山郁夫は、1921年（大正10）に再び母校の教壇に立った。しかし、1926年（大正15）12月に大山が労働農民党中央執行委員長に就任すると、彼の辞職を要求する総長高田早苗以下の大学当局と、大山の留任を求める学生との対立が激化した。最後には、大学が大山を解職するというかたちで事件は決着したが、納得しない学生たちは大山の告別演説会を開催するなど、大学に対して激しく抵抗した。

### 主な展示資料



大山郁夫解職に関する文書  
1927年1月26日





大山郁夫「早稲田の學徒に與ふ」  
 (『改造』1927年3月号所収)

### 早慶戦切符事件

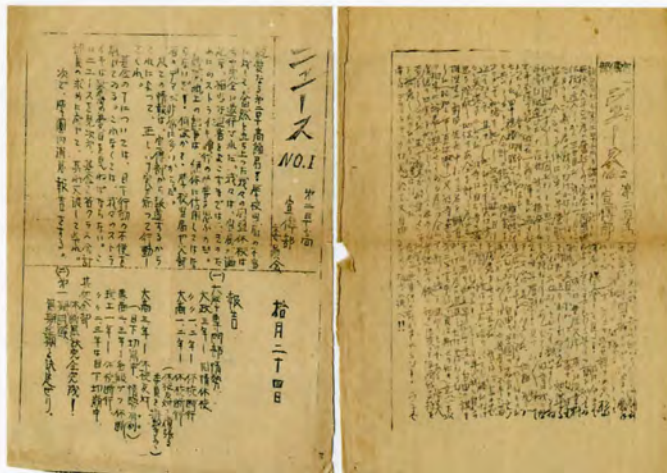
1930年（昭和5）10月、大学による早慶戦チケットの配布方法をめぐる不正疑惑に端を発した早慶戦切符事件は、学生の自治的活動の要求や大学の保守化批判といった大規模な騒動へと拡大した。

大学は学生の動向を「危険的思想系統に属する一部の徒」による扇動であるとしたため、学生はこのような大学の態度に猛反発した。10月21日以降はいくつかのクラスで同盟休校が行われ、また校友有志による大学批判の声も起こった。多くの学生には、学問の自由を規制する政府当局に追従した学苑への不満が根強く存在したのであった。

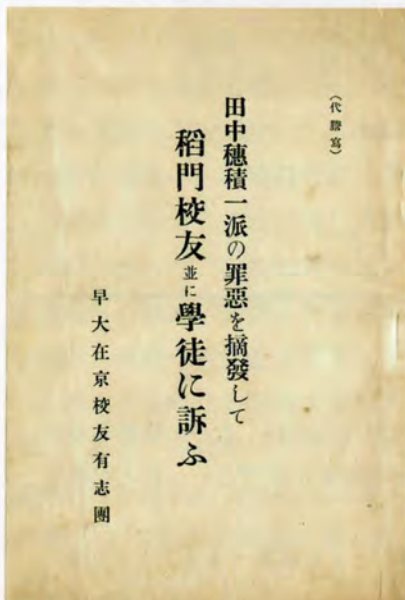
最後には、校友中野正剛の調停によって、11月17日に騒動に一応の解決がなされた。

この騒動の勃発するゆゑんは深くかつ遠い。理事会というものが営業部のような外観を呈し、教授連中の権威があまりに失はれてゐた。この大騒動を起し二万の子弟を預かつてゐる学校側において、一人の教授も裸になつて学生に赤心を吐露する人もなければ、面を犯して理事会の反省を促すものもない。これは明白に学校精神の腐敗である。

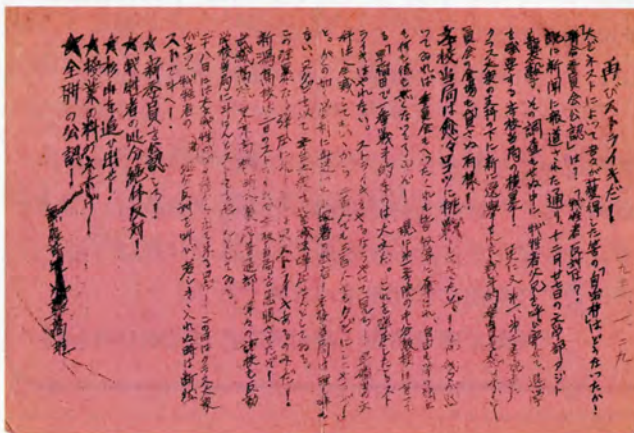
中野正剛の感想『報知新聞』1930年11月14日



ニュース No.1、宣伝部ニュース No.2  
第二早高宣伝部発行  
1930年10月24日、26日



田中穂積一派の罪惡を摘發して稲門校友並に學徒に訴ふ  
早大在京校友有志團



早慶戦切符事件関係ビラ  
「再びストライキだ!」【パネル展示】  
無産青年第二早高班 / 1931年1月29日





早慶戦切符事件に関する大学の説明文書（父兄保証人に向けて発行されたもの）  
早稲田大学／1930年11月3日

早慶戦切符事件関係ハガキ

委員より岩瀬良二宛／1930年10月27日、11月4日、8日

早慶戦切符事件当時、学生の間で交わされた葉書。「臨時明け後の指令が明五日早朝発表せらる、故明日午前十時迄に過日戸山ヶ原で集合した場所へ再度集合せられ度し」（11月4日付）、「アヂト（亀井方）に午後二時半迄に集合せられたし」（11月8日付）などの記述がある。

昭和五年度 学生運動資料綴（早慶戦切符事件関係）

第一早稲田高等学院／1930年

早慶戦切符事件のみならず、学生の政治運動への関わりに対して、大学は神経を尖らせていた。本資料は、日常的な学生の動向に関する情報収集など、大学の“積極的”な学生への監視活動を示す文書である。



日支事変ニ依ル支那留学生ノ動揺及諸学校ノ対応措置ニ  
関スル調査  
外務省文化事業部／1932年6月



日本共産党公判闘争代表陳述速記録（佐野学、1931年7月11日～14日）

佐野学（1892-1953）は東京帝国大学卒業、1921年より早稲田大学商学部講師。1923年6月の研究室蹂躞事件によって学苑を解職となる。1929年上海で検挙、以後裁判闘争を指導したが、1933年に鍋山貞親とともに共同転向声明を発表。1943年出獄、戦後早稲田大学に復職した。



新聞記事「不良狩り」を繞る動き・要は早稲田の浄化【パネル展示】  
『早稲田大学新聞』／1938年6月15日



## 2 戦争への熱狂

1931年（昭和6）の満州事変、1937年（昭和12）の日中戦争開戦によって、大学でも戦争関連のイベントが立て続けに実施された。学生のサークル活動においても、軍事関連の内容が目立つようになる。

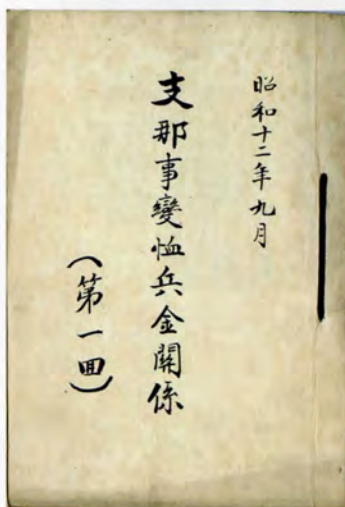
大学は“積極的”な国策への追従を一層加速させた。1936年（昭和11）2月には本学で初めての紀元節奉祝式が、同年11月には明治節の神宮参拝が行われ、以後敗戦まで毎年実施された。また、1937年12月には、戸塚球場において南京陥落祝賀式が挙行されるなど、キャンパス内も戦時色に染まることとなった。

### 主な展示資料



若き学徒の歌 第一席入選とその他入選作品／1940年

紀元2600年を祝して学生から作詞を募った。第一席入選には伊藤寛之（政治経済学部3年生、西條八十が主宰した『蠟人形』の同人でもあった）の作品が選ばれた。

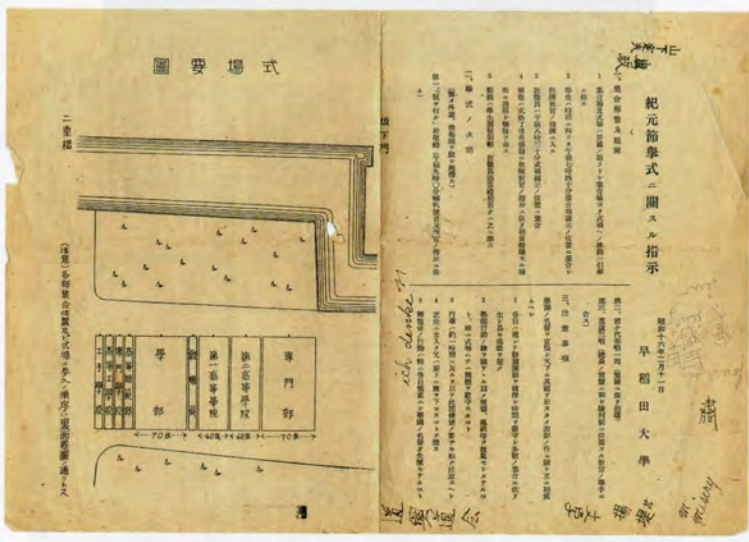


支那事変恤兵金関係第一回  
早稲田大学／1937年9月





新聞記事「校庭に戦車と毒瓦斯 プールに駆逐艦」【パネル展示】  
 『早稲田大学新聞』 / 1937年11月24日



紀元節挙式に関する指示  
 早稲田大学 / 1941年2月11日

## II 戦時体制と早稲田

1937年（昭和12）の盧溝橋事件によって中国大陸での戦争が本格化した。これによって、社会全体が戦時体制へと向かっていった。1938年（昭和13）の国家総動員の制定、平和産業の軍事産業への転換など、総力戦体制へと移行する情勢に対して、もちろん大学も無縁ではなかった。早稲田大学においても、国策に順応したカリキュラムの再編や研究所の創設が矢継ぎ早に行なわれた。

1938年4月には「東亜の文化開発に雄飛すべき青年学徒を養成」するという理念を掲げた特設東亜専攻科が設置され、同年7月には東亜経済資料室が、1940年（昭和15）11月には興亜経済研究所が設置されるなど、国家が掲げる理念と学問との癒着が顕著となっていった。

一方で大学は、津田左右吉や京口元吉など、自由主義的・反天皇制的とのレッテルを張られた教員に対して、辞職を要求するなど、“学の独立”からは大きく乖離する態度をとることとなった。

### 主な展示資料



青年学徒の出陣に臨み（草稿）  
〔田中穂積〕

「昭和十八年十月三十日放送」と  
書き込みあり。



中野登美雄宛永井柳太郎書簡  
1944年9月19日

中野登美雄の総長就任に対して、戦時下の難局における決断を称賛する書簡。



## 戦時下の二人の総長

——田中穂積と中野登美雄——



田中穂積 (1876.2-1944.8)

長野県更級郡川柳村石川（現在の長野市篠ノ井）出身、松本中学校に入学するも肺ジストマのため退学、生家で療養しながら東京専門学校講義録で独学した。1895年（明治28）11月に東京専門学校邦語政治科第二学年へ編入学、翌年7月の卒業後は東京日日新聞社に入社した。

1901年（明治34）には東京専門学校留学生としてコロンビア大学に留学して、帰国後の1904年（明治37）から母校の教壇に立った。1924年（大正13）からは常務理事として高田早苗総長を補佐、1931年（昭和6）6月から逝去する1944年（昭和19）8月まで第4代総長を務めた。

総長としては、木造中心であった校舎のコンクリート化など、キャンパス整備に貢献した。



中野登美雄 (1891.7-1948.5)

北海道札幌市出身、1912年（大正元）早稲田大学高等予科に入学、1916年（大正5）に大学部政治経済科を卒業。1918年（大正7）よりシカゴ大学・ソルボンヌ大学等に留学、1923年（大正12）早稲田大学助教授に就任した。代表的著作は『統帥権の独立』。

1942年（昭和17）から塩沢昌貞の後任として政治経済学部長に就任、田中穂積総長死後の1944年（昭和19）8月に第5代総長に就任した。総長就任後は勤労働員や空襲など、戦時体制への対応を迫られた。

1946年（昭和21）1月に総長を辞職、同年10月公職追放となり、その後、教職に復帰することなく1948年（昭和23）5月に逝去した。







### Ⅲ 戦時体制と学生生活

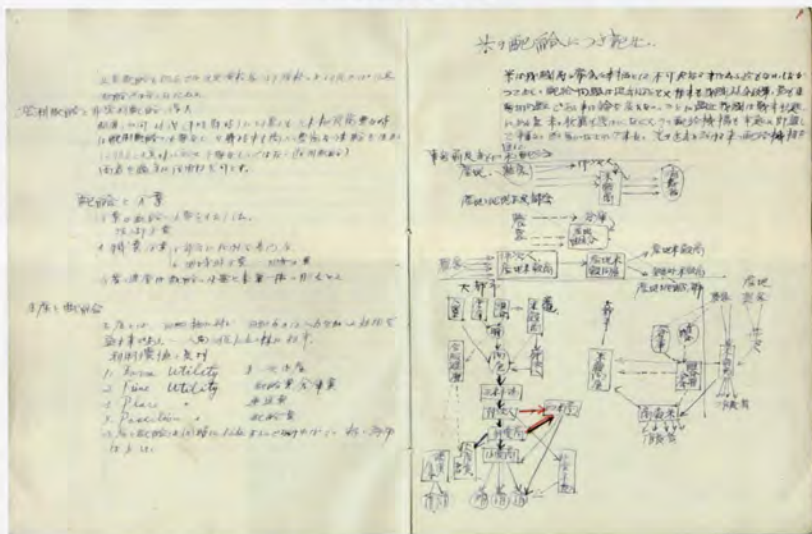
総力戦体制下において、学生生活も戦時色の強いものとなった。1933年（昭和8）7月には学部学生に対して初めての野外教練が実施され、1940年（昭和15）10月には「国是即応、体力練磨、集団訓練」を綱領として掲げた学徒錬成部の新設が決定されるなど、学校教育は形骸化し、学生生活も軍事一色となっていった。

1941年（昭和16）8月には勤労働員の組織化を目的とした早稲田大学報国隊が結成され、各地への勤労働員が本格化した。学生生活は、教室で学ぶことよりも、軍事工場での労働作業が中心を占めるようになる。

また、1939年（昭和14）に初めて正規学生として入学した女子学生も、戦時体制下において同級生たちを戦場に送り出す役割を担わされた。

そのような状況下においても、“日常的”な学生生活は確かに存在した。友と語り合い、レポートや卒業論文の制作に埋没するといった一見平穏な日常である。しかし、その日常が戦争や死と常に背中合わせであったことを忘れてはならない。

#### 主な展示資料



受講ノート 配給論

川村芳太郎 / 1941年～1943年

川村芳太郎は1921年山形県鶴岡市出身、1941年4月に専門部商科に入学。1943年9月に繰り上げ卒業となり、同年12月に入営した。1945年5月1日、沖縄戦で死去。





卒業論文

P.R.B. における DANTE GABRIEL ROSSETTI

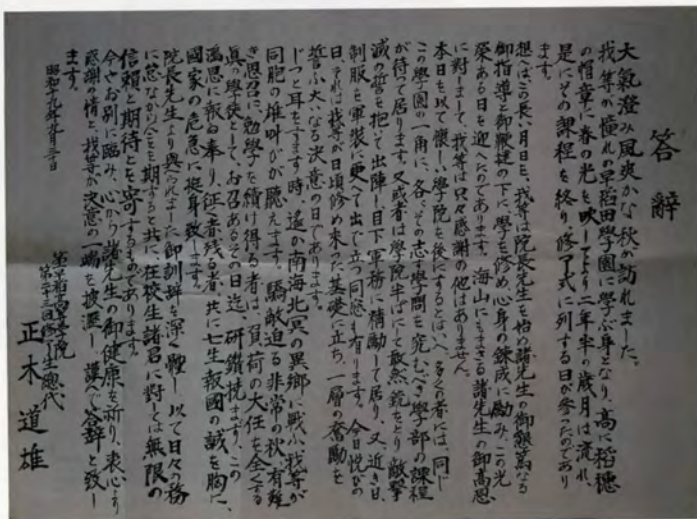
楊國喜 / 1941年 3月



〔夏季休暇中の課題〕

早稲田大学高等師範部長  
原田實

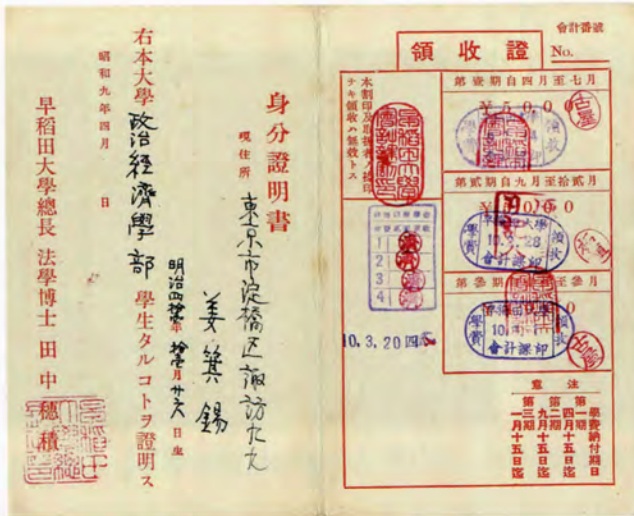
1939年 7月 3日



答辭

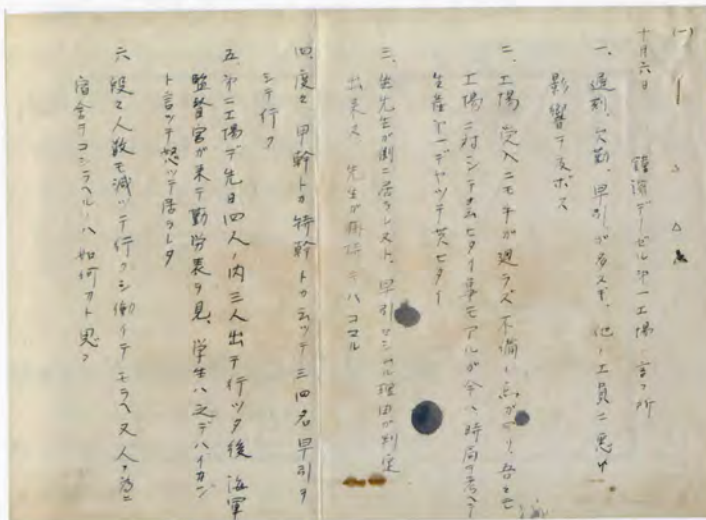
第一早稲田高等学院第二十三回  
修了生総代 正木道雄

1944年 9月30日



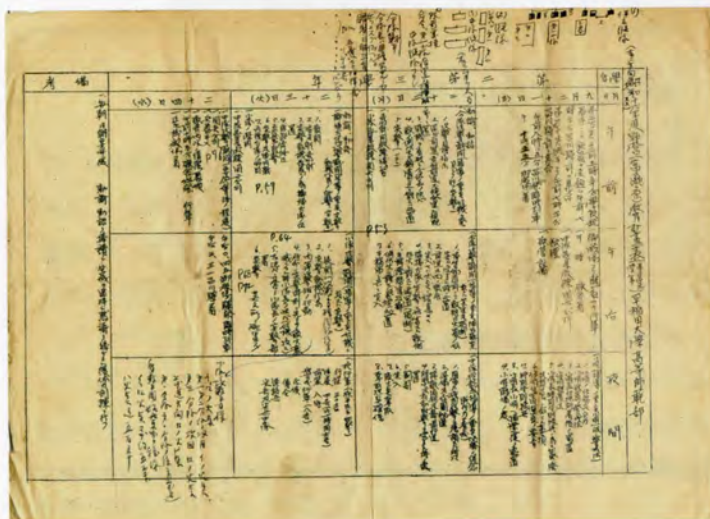
昭和九年度 早稲田大学学生証  
姜箕錫 / 1934年

姜箕錫は1908年生まれ、1936年に早稲田大学政治経済学部を卒業。戦後は大韓民国行政府企画処物価計画局長、同復興部調整局長などを歴任した。2000年に逝去。



鐘淵デーゼル第一工場ノ言フ所  
【パネル展示】  
1944年頃カ

学徒動員を受け入れた側の不満や要望を 書きとめた文書。学生の厭戦意識、労働に対する非協力的態度を伺うことができる。

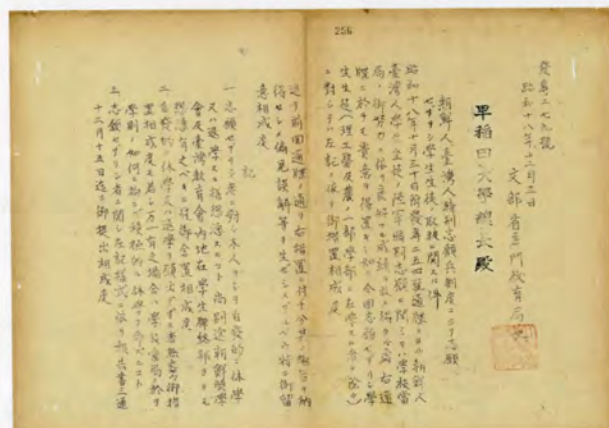


昭和十六年度野営（富士瀧ヶ原）教育計画表（第二第三学年）  
早稲田大学高等師範部





写真 野外軍事教練(左)と学徒練成部(右) 1941年~1943年【パネル展示】



朝鮮人台湾人特別志願兵制度ニヨリ志願セザリシ学生生徒ノ取扱ニ関スル件  
文部省専門教育局長／1944年12月3日

### 植民地出身学生と戦争

戦時下、植民地である台湾・朝鮮半島は徴兵令の対象外であった。1943年（昭和18）10月に学生の徴兵猶予が解除され、多くの“日本人”学生は戦地へと送られた。植民地出身学生に対しても、1944年（昭和19）10月3日「朝鮮人台湾人学生生徒ニ関スル件」が通牒され、志願兵として戦場に動員された。しかし、志願というのは名目のみで、実際には志願を拒否する学生に対しては、大学が“自主的”に休学・退学させることが指示された。本来徴兵の対象ではない植民地出身学生を、実質的な“強制”によって戦争へ動員したのであり、植民地支配の本質を示すものである。

## IV 敗戦と混乱

### 1 戦時下の学苑と学生

1943年（昭和18）10月以降、多くの学生は戦地に動員され、学苑キャンパスは閑散とした状態となった。授業もほとんど行われず、残留学生の多くも勤労動員によって学習機会を奪われた。

1944年（昭和19）11月に東京は最初の空襲を受け、以後は残留学生にとっても戦争はより“身近な”ものとなった。教職員が中心であった特設防護団も、1944年2月には残留学生を組み込んだ組織に改編された。1945年（昭和20）3月には、理工系の残留学生を中心とした学徒消防隊が結成され、各地の消防署に配属された。

空襲による大学・学生の被害も甚大であった。1945年5月25日の大空襲によって大学キャンパスは三分の一を焼失した。恩賜記念館・第一高等学院校舎などが全焼、大隈会館（旧大隈邸）もこの空襲で焼失した。また、1945年3月10日のいわゆる東京大空襲では学徒消防隊の学生7名が犠牲に、8月7日には学徒勤労動員で豊川海軍工廠に動員されていた15名の学生が空襲の犠牲となった。

戦地に赴いた学生のみならず、残留学生にとっても戦争と“死”は、現実的な存在であった。

### 主な展示資料



長尾明宛池田恒彦書簡

1945年8月7日

健民修練所の長尾明氏に送られた書簡。特に高見豊教授の解析幾何学の授業に関して、その内容や進捗状況を詳細に知らせている。また、知多半島への勤労動員が決定したこと、8月15日現地集合や現地の状況などが記述されている。





## 2 敗戦と学苑の混乱

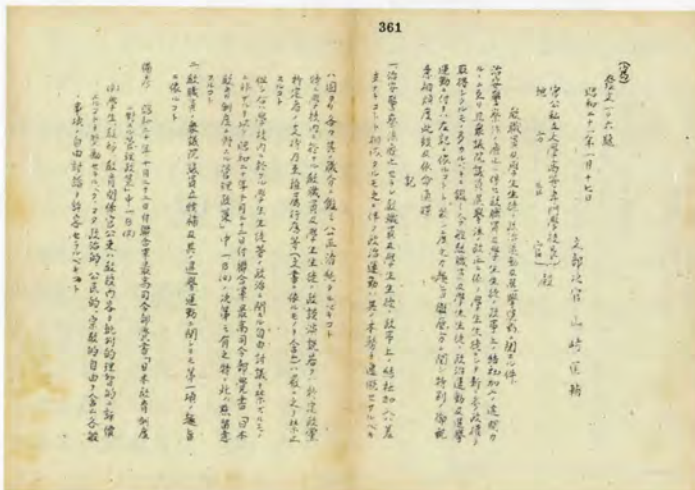
1945年（昭和20）8月15日の敗戦によって、大学や学生も戦時体制からの“脱却”することとなった。9月には授業が再開され、戦地からも多くの学生が学苑に戻った。しかし、大学が自らの戦争責任に関して、明確な“清算”を行うことはなかった。学生は、このような大学の“無責任”や“手のひらを返したような対応”に対して敏感に反応し、様々なかたちで声を挙げた。

一方、大学はGHQ／SCAP（連合国最高司令官総司令部）やCIE（民間情報教育局）の矢継ぎ早な“教育改革”への対応を迫られた。大学関係者も戦争責任を追及され、公職追放や適格審査の対象となることもあった。そして、敗戦後の混乱のなか、大学は戦後の新しい教育システム（新制大学）への対応という新たな課題に直面していくこととなった。

### 主な展示資料



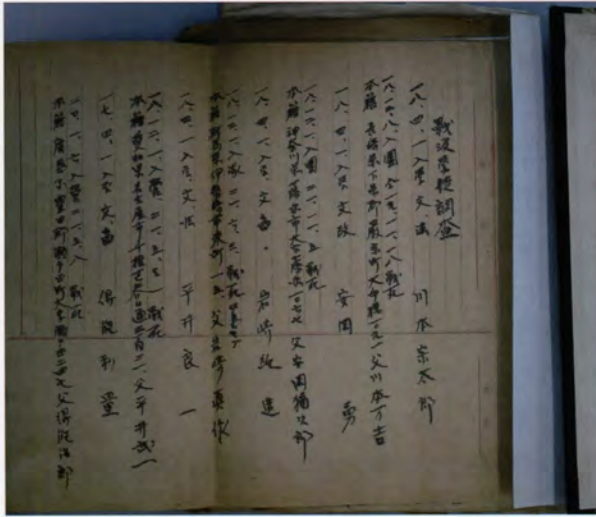
時局ノ変転ニ伴フ学校教育ニ関スル件【パネル展示】  
1945年8月28日



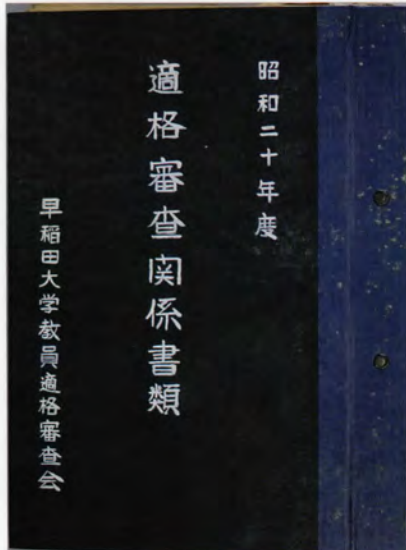
教職員及学生生徒の政治運動及選挙運動に関する件  
1946年1月17日

学校内での学生・教員の政治演説、及び政治活動（特定政党・候補者に関する応援活動、文書配布活動）を禁止する内容。

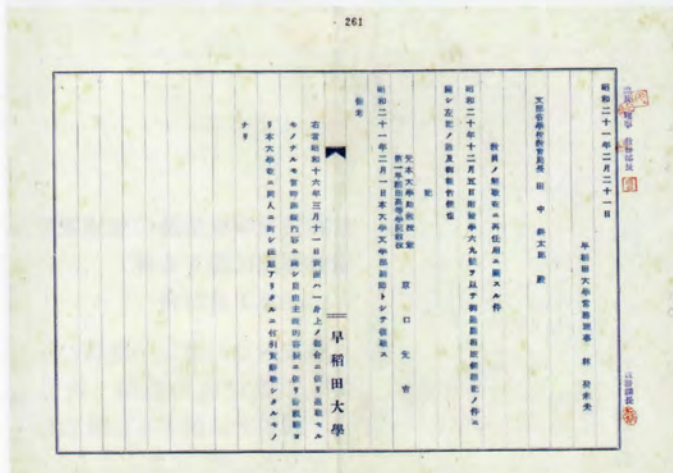




学生身上調査報告控 戦没者調書・  
処罰者調書・海外引揚学生調書  
早稲田大学第一高等学院  
1946年9月-1948年9月



昭和二十年年度 適格審査関係書類  
早稲田大学教育適格審査会  
1945年-1947年



教員ノ解職並ニ再任用ニ関スル件  
(京口元吉)

1946年2月21日

1941年3月、文学部教授であった京口元吉は、警視庁より講義内容が自由主義的であると指弾を受け“辞職”した。資料には「表面ハ一身上ノ都合ニ依リ退職セルモノナルモ(略)引責解職シタルモノナリ」と記載されている。



新聞記事「津田博士遂に辞退 白紙に還った総長選挙」  
 『早稲田大学新聞』／1946年7月

### 幻の総長—津田左右吉—

敗戦後、大学関係者も戦争責任を問われ、公職追放処分の対象となった。中野登美雄総長もその一人であり、1946年（昭和21）1月に自ら辞職を願い出た。

後任の総長選出は難航した。1946年5月発効の新校規では、選挙人による総長選挙制が導入された。1946年6月10日に総長選挙人会が開催され、津田左右吉が新総長に選出された。しかし、大学の要請を津田は固辞した。津田は1940年（昭和15）にいわゆる“津田事件”によって学苑を追われた人である。

大学は津田の疎開先である岩手県平泉に赴き説得を行ったが、津田を翻意させることはできなかった。津田総長は幻に終わった

再び総長選挙人会が開かれ、第6代総長には島田孝一が選出された。戦時下にあって津田を守ることができなかった大学が、敗戦後に津田を次期総長に選出するという一連の行動は、当該期における大学の混乱を象徴するものともいえる。





佐倉設営経過報告  
臨時佐倉設営部々長 内藤多仲  
1946年9月29日

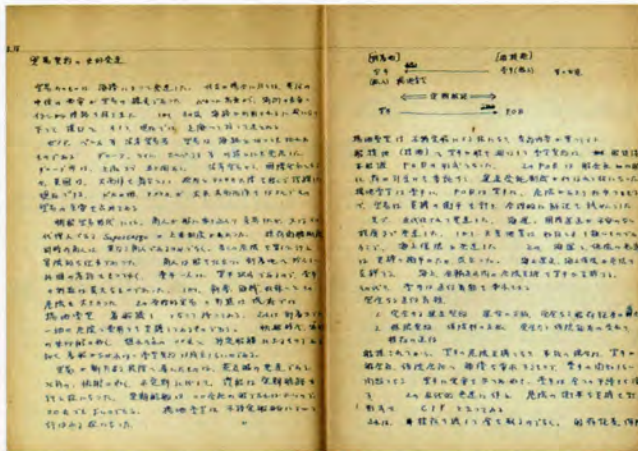
### 佐倉キャンパス移転計画

授業再開に伴う校舎不足を解消するために浮上したのが、高等学院の千葉県佐倉町（当時）への移転案である。佐倉連隊跡地と部隊兵舎を再利用しようとするものであり、1945年（昭和20）10月には、内藤多仲・村井資長らが現地視察と佐倉町との交渉を行なった。

同年12月には、臨時佐倉設営部（部長内藤多仲）が設置され、キャンパス移転が本格化した。しかし、学内の反対意見や、佐倉町との交渉不調などもあり、1946年（昭和21）9月に計画の断念が決議された。







講義ノート 上坂西三「貿易実務」  
石橋直幸／1948年頃



声明（藤間生大出講停止に関する抗議文）  
文学部史学科学学生全員  
1947年 8月10日

### 大山郁夫と早稲田

大山郁夫は1905年（明治38）に東京専門学校を卒業し、1915年（大正4）から母校早稲田大学の教壇に立った。1917年（大正6）の早稲田騒動では恩賜館プロテスタントの一員として高田総長と対立して、騒動後に学苑を去った。1921年（大正10）に大学に復帰したものの、1927年（昭和2）に労働農民党委員長就任をきっかけとする大山事件で解職となった。1932年（昭和7）にはアメリカに亡命し、敗戦後まで日本に戻ることはなかった。

日本の敗戦によって大山の境遇は一変した。学苑では1945年（昭和20）12月、政治経済学部教授会が大山の教授復帰を決議し、翌年2月には学生自治委員会有志による大山郁夫帰校促進準備会が発足した。1946年（昭和21）の総長選挙の際には、候補者として大山の名前が挙がっている。

1947年（昭和22）10月、大山は15年振りに帰国した。大学では10月28日に歓迎大会が開催され、翌1948年（昭和23）5月には再び母校の教壇に立つこととなった。

## ——エピローグ

1949年（昭和24）、新制早稲田大学が誕生し、新日本建設のスローガンに相応しい教育機関たるべきことが、大学には要請された。しかし、民主国家建設の道程は平坦ではなく、冷戦体制のなか、新日本の本質があらためて問われることとなった。こうしたなか、学問の自由や大学の自治を要求する学生たちの声が、学苑キャンパスを埋めつくす時代を迎えることとなる。

2014年10月1日発行

発行者 早稲田大学大学史資料センター

〒202-0021 東京都西東京市東伏見3-4-1

Tel 042-451-1343 Fax 042-451-1347

URL <http://www.waseda.jp/archives/>

印刷・製本 (株)三美印刷





2014年度秋季企画展  
十五年戦争と早稲田

会期 2014年10月1日(水)～11月8日(土)

会場 早稲田大学大隈記念タワー10階 125記念室

時間 10:00～18:00